2023.1.22.
T.Kobayashi

大相撲初場所観戦雑書き日記
混戦・乱戦を征したのはこの人だった

横綱１人・大関１人・関脇４人・小結４人という異例な番付が発表されて、新聞紙上を賑わした。
ところが、横綱照ノ富士の休場が発表され、驚きはさらに増した。
一人しかいない大関も、これまでに怪我による休場や不調を繰り返してきたので、どこまで信頼できるのだろうかと不安に思う人が少なくなかった。場所の途中で「横綱・大関不在」となりはしないかと心配する声が数多く聞かれたのも事実である。

	5日目	中日	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目	千秋楽
全勝	阿炎 碧山 琴勝峰							
1敗	貴景勝 豊昇龍 大栄翔 錦木 阿武咲 東龍	貴景勝 琴勝峰	貴景勝					
2敗	（省略）	豊昇龍 大栄翔 阿武咲 碧山 東龍 宝富士	阿武咲 琴勝峰	貴景勝 阿武咲	阿武咲			
3敗	（省略）	霧馬山 玉鷲 阿炎 竜電 錦木 北勝富士 宇良 平戸海 一山本	玉鷲 錦木 平戸海 東龍	玉鷲 琴勝峰	貴景勝 琴勝峰	貴景勝 阿武咲 琴勝峰	貴景勝 琴勝峰	貴景勝

2日目、貴景勝が翔猿に叩き込まれて、序盤（5日目）が終ったところで全勝は平幕の三力士だけになってしまった。出場している全力士の実力が拮抗しているためか星のつぶし合いになってしまい、
中日を終えて全勝はいなくなり、1敗が2人・2敗が6人・3敗が9人という状態になった。貴景勝が先頭に立ったことで、なんとか面目が立った感じではあるが、後半戦の行方が心配になってくる。

9日目になると「団子状態」の崩壊が始まり、1敗は貴景勝、2敗は阿武咲・琴勝峰、3敗に8人と削ぎ落とされるようになってきた。相撲に幅があり、比較的安定した中にも力強さがある取り口だった関脇の豊昇龍は、若元春戦で敗れた上に足を痛めてしまい、優勝戦線から脱落。

そして 10 日目が終ると、1 敗は貴景勝、2 敗は阿武咲・琴勝峰、3 敗に 4 人と計 7 人に絞られた。
貴景勝は気合いがこもった突き押しで先頭を走ってはいるが、相手にかわされたら一瞬にして転げ落ちる危険性をはらんでおり、常に不安がつきまとう。阿武咲は神がかりにかかったように直線相撲を力強く続けているが、これもまた一触即発の危険と背中合わせの感がある。琴勝峰は、これといった強い武器があるわけでもなく若い割りには淡々とやっているだけで、迫力は感じない。誰が生き残りそうなのか想像もつかない。

11 日目は、錦木・玉鷲戦と阿武咲・琴勝峰戦が組まれた。玉鷲は 38 才とは思えぬような迫力ある相撲で錦木を下して生き残った。また阿武咲も力強い前進圧力をベースにしたすくい投げで琴勝峰を征した。
しかし、貴景勝は中途半端な体当たりで琴ノ若に捕まってしまい、押し倒されてしまった。
そして、11 日目を終えた所で、賜杯争いは 2 敗の二人と 3 敗の二人の計四力士に絞られた。
ここまでで今場所の三賞について少しだけ考えて見た。
殊勲賞（上位力士を相手に優勝の行方を大きく左右する勝ち星をあげた人）は誰なのか。琴ノ若になるのだろうかと思いはしたが、まだ勝ち越していない。
技能賞（技能・技巧相撲に優れていて好成績を上げた人）は誰か。玉鷲・阿武咲あたりかなとは思うが、技能賞と言って称えるほどのものなのだろうか。
敢闘賞は解釈の幅が広いので該当者はいくらでもいる。前頁の表に載った力士ならば誰でも説明がつく。
どんな結果になるのか楽しみだが、誰が優勝するのかによっても変ってくることだろうし、さてどうなるか。

12日目、琴勝峰はやや手こずったが錦木を下して3敗を堅持した。玉鷲・阿武咲戦は突き押し相撲同士の対決で、しかも今場所充実して安定している取り口の力士同士の対決なので注目した。阿武咲の低い位置からの突き上げるような押しが光り、さらに玉鷲の良く伸びる腕での突き返しもあり熱戦になったが阿武咲が征した。
そして結びの一番、貴景勝は霧馬山のすくい投げに屈して、トップの座を明け渡した。霧馬山の攻めも見事だったが、10日目あたりから貴景勝の攻めのリズムにどことなくぎこちなさが感じられるようになってきた。いつか崩れるのではないかと注視していたが、それが今日になってしまった。
結果として、阿武咲が2敗でトップに立ち、貴景勝と琴勝峰が3敗で追う形になった。

13日目、琴勝峰は、腰高のまま前のめりになって腕を伸ばすだけの阿炎をうまく裁いて3敗を守った。
そして結びの一番で2敗の阿武咲と3敗の貴景勝との対決。突き押し相撲同士の取組はスピードもあり迫力もある一戦となった。貴景勝の張り手に阿武咲が張り返したことで墓穴を掘り、勝敗は決まった。張られた力士が「腹を立てて張り返すときは必ず脇があいてバランスが崩れて負けにつながる」と言われているが、まさにそのとおりになってしまった。終始阿武咲のペースで進んでいただけに惜しまれる張り返しになってしまった。
この結果、3 敗の先頭集団が再び3人になり、千秋楽までもつれ込む可能性が高くなった。

14日目、琴勝峰は大栄翔の厳しい突きをかわして脇を挟み、素早い寄り身で土俵外へ運び3敗を守った。
続く土俵は霧馬山・阿武咲戦。機敏で多彩な霧馬山の相撲に翻弄された阿武咲は4敗に後退。
結びの一番、貴景勝は足首を痛めていて踏ん張りの効かない豊昇龍を難なく下して 3 敗を守った。
これで、優勝争いはようやく二力士に絞られて、「千秋楽結びの一番で直接対決」という興行的にも理想的な展開となった。

千秋楽、結びの一番で直接対決。
立ち合いのもみ合いの末、貴景勝が挿したかいなを大きくすくって琴勝峰を転がして賜杯を手にした。番付上の最高位である大関が優勝することで相撲協会としてもメンツを保つことが出来た。
殊勲賞は該当なし、敢闘賞は琴勝峰、技能賞は霧馬山となったが、千秋楽結びの一番まで賜杯の行方をわからなくした琴勝峰の活躍に殊勲賞も授与してもよかったのではないかと感じた。

優勝争いだけに焦点を合わせて15日間を追い続けたメモ書きをしてきたが、この表に載らなかった11勝4敗以下の力士の中に何人か注目に値する働きを見せた力士がいた。確実に次の時代の幕が近いところに来ていることを感じた場所だった。

◆関連情報　https://www.sumo.or.jp/ResultRikishiData/profile/3582/
貴景勝のプロフィール情報（日本相撲協会のホームページに掲載されている）
序の口以来の全成績が閲覧できます。

◆参考資料 ＜幕内力士の年齢別（誕生年別）分布＞
今場所幕内に在籍した全力士を年齢（誕生年）別に並べて見た。
世代交代の境界線が感じられたり、同世代の競り合いが見えたりする。また年令に関係なく淡々と我が道を進む力士がいたり、今場所限りで引退する力士もいたり、40才を目前にして力と勢いが衰えていない玉鷲のような力士がいたりで、面白い。さらに今場所勝ち越しした力士を赤字にして目立つようにしてみた。
何も解説の必要はなく、この表を眺めているだけで様々なことに気がつく。

＊：隠岐の海は今場所で引退

誕生年	力士名	人数
昭和61年以前	玉鷲、碧山、隠岐の海（＊）、	3人
昭和62年（1987年）	妙義龍、佐田の海、栃ノ心、東龍、宝富士	5人
昭和63年（1988 年）		
平成元年（1989 年）		
平成2年（1990年）	高安、竜電、錦木、遠藤	3人
平成3年（1991年）	照ノ富士、正代、千代翔馬、琴恵光、剣翔、千代丸	6人
平成4年（1992年）	翔猿、御嶽海、北勝富士、宇良	4人
平成5年（1993年）	若元春、大栄翔、逸ノ城、一山本	4人
平成6年（1994年）	若隆景、阿炎、隆の勝、輝、水戸龍	5人
平成7年（1995年）	明生	1人
平成8年（1996年）	貴景勝、霧馬山、翠富士、錦富士、阿武咲	5人
平成9年（1997年）	琴ノ若	1人
平成10年（1998年）		
平成11年（1999年）	豊昇龍、琴勝峰	2人
平成12年（2000年）	王鵬、平戸海	2人

◆このままで良いのか？
必要以上に大型化した体型と、基礎的な技術の習得不充分が様々な問題の糸口になって、怪我の続出や人間としての短命化などにもつながっている。若手力士育成にあたり、処すべき課題が沢山あるように思う。
また、三場所だけの成績で決める「瞬間最大風速をベースにした昇進基準」で、急いで大関を作ってきた結果、今場所のような異例な番付が出来てしまった。横綱昇進についても「二場所の成績だけを重視」しており、同じことが言える。
大関昇進や横綱推挙の基準・規則を見直して、より質の高い評価基準に基づく、より明確な基準の制定が急務である。

以上